

◎ 初心者ボランティアのために

村井 雅清

■「何もできないかも知れないが、でも何か役に立つのではないか？」

中国四川省地震（2008年）が発生した時に、大阪に住む1人のボランティアがこのような思いを抱いて飛行機の切符を買い、四川省に飛んで行きました。

一見軽率な動機のように思われるかもしれませんが、阪神・淡路大震災のときのボランティアの多くも、自分が行って役に立つだろうか？ 迷惑にならないだろうか？ という不安を抱えながら被災地に駆けつけてきました。

そして、その四川省に行った彼は、その後東日本大震災（2011年）にもかわり、「何もできないかも知れないからこそ、何でもできるのではないか！」と気づいたといわれました。以後、彼は2年以上にわたって東日本大震災の被災地に通い続けました。とにかく必要な情報を得て現場に行くことが先決で、現場に行けばきっと学ぶことがあるはずです。

■ボランティアの意義は「多様性」

阪神・淡路大震災後、全国から1年間で約137万人のボランティアが被災地に駆けつけてきました。その137万人のボランティアのうち、実はすでに2ヶ月で100万人を超えており、なかでもボランティアをするのは初めてという初心者ボランティアが7割も占めていたのです。

なぜボランティア元年といったのでしょうか。それは、先述したように初心者ボランティアが多かったというところに理由があると思います。つまり、初心者ボランティアがくりだす活動が、「制度化の発達によって硬直化した社会の仕組み（特に行政のしくみ）の『隙間』を行動によって埋めたり縫合したりしつつ、人々と社会に『新しい価値観』の共有を呼びかけ、社会の仕組みの解体・再構築をはかろうとするところにある。」（柳田邦男 2011 『想定外』の罫——大震災と原発』文藝春秋）ということに尽きると思います。それは、十人十色のボランティアだからこそなせる多様性の意義だといえます。

■多様性と個の尊重は、ボランティアの代名詞！

被災地に駆けつけたボランティアは、一人ひとりの被災者に寄り添い、対応

します。決して「被災者のすべてに〇〇が必要だ！」とはなりません。被災者の一人ひとりの被災の事情が異なるからです。したがって被災者が要望することはみんな違って当然です。なかでも「災害弱者」といわれる人たちは深刻です。障がい者は、苦勞して避難所にやっとの思いで辿り着いたと思ったら、障がい者用のトイレがない！ 3日3晩飲まず食わずで辛抱したという証言もあります。また、乳飲み子を抱えたお母さんは粉ミルクを求めて走りまわっています。こういう事態に対してボランティアは目の前の一人ひとりに対応してきました。阪神・淡路大震災の初心者ボランティアは見事にこれをやったのけたのです。初心者だからといって、決して被災地は混乱していません。

こうして「すべて」と一括りにして、あまねく平等に対応しようとするのではなく、「一人ひとり」という寄り添い方は、大きな価値観の転換をもたらしたことになります。こうして一人ひとりに寄り添い、違うことを理解し、個の尊重に徹すると多様性は生まれます。

■災害ボランティアは何でもありや！

筆者は、災害時において先述したような活動を展開した初心者ボランティアの振る舞いを見て、「ボランティアは何でもありや！」といい続けています。もちろん尊いのちを、自然を、大切にしよう！ ということを前提としてです。

むしろ「あれしてはいけない！ これしてはいけない！」と制約をつけると、そこには多様性も生まれえないし、個の尊重もできないでしょう。災害時において「何でもありや！」と乱暴なことをいうと、被災地が混乱すると思われる方が多いのですが、阪神・淡路大震災でも、2014年に発生した「平成26年8月豪雨（広島土砂災害）」でも、ボランティアは「そこそこ」自由にやっても被災地は混乱しませんでした。亡くなられた精神科医のなだいなださんは、ご自分の勤務していた施設で、アルコール依存症の患者を診ておられたときに、施設の門を閉鎖していたら、患者はその門を越えて酒場に飲みに行ったそうです。ある日、先生が門を開放して自由に飲みに行きなさいとしたら、誰も飲みに行かなくなったとのこと。そこでなだ先生は、「人間は信頼関係さえあれば、そこそこ自由にしてもやっていけるんだ！」と学ばれたそうです。「そこそこ」が大事なキーワードなのです。

■被災者支援のボランティアは、被災者の自由とは何かを考えること

災害直後の被災者支援に行くと、被災者から求められているニーズは何か？という議論をします。しかし、大切なのはニーズが何かではなく、被災者が自由になるということはどういうことなのかを考え、行動することではないでしょうか？たとえば「炊き出し」は、支援する人たちが食事をつくり、被災者は配食された食事を戴くだけです。これを、炊き出しをするための道具（鍋、まな板、包丁、コンロなど）と食材を提供するから、ご自分でやりますか？と被災者を訪ねて回ったらどうなるでしょう。「鍋釜作戦」といって、阪神・淡路大震災のときにはそのようなボランティアが生まれたのです。

被災者に自由があればとはこういうことではないでしょうか？きっと、ご自分で食事をつくることによって「自立」の第一歩が始まると思います。ボランティアも智慧を絞りださなければならないのです。

■復興につながる活動をしよう！

誰でもできる足湯ボランティア（バケツにお湯をいれて、10～15分足を浸し、手は擦ります）は、至近距離で被災者と体面し、傾聴を目的とする活動です。お湯の力によって身体の芯から温まり、被災者は辛い話を含めいろいろな話をされます。ボランティアに聞いてもらうだけで、ストレスが軽減されるようです。いわば、「心のケア」にもなっているといえるでしょう。

この被災者がボランティアに語り出す内容を分析してみると、被災者が何を求め、何に悩んでいるのかがわかる場合が少なくありません。復興の過程では、被災者にとって暮らしの再建が最も急がれることですが、そのうえで「心のケア」も忘れてはならないことです。ボランティアが被災者の傍にただで、心のケアのお手伝いをしていることになるのですが、このことは被災者が自立していくための不可欠な「杖」なのかもしれません。

とにかく、ボランティアという一歩を踏み出してみましよう！！